藤井高尚の枕冊子研究について（続）

——藤井高尚、清少納言枕冊子 関係略年表——

柿谷雄三

一

わたくしは、かつて、

1「藤井高尚の枕冊子研究について」[1]

2「藤井高尚と清少納言枕冊子」[2]

の小論において、1では、

吉備津神社蔵、高尚自筆『枕冊子新釈一』一冊

岸上慎二博士蔵、高尚書写書入『枕冊子』（『枕草子校本』）五冊

田中重太郎博士旧蔵、高尚書入『枕草子春曙抄』十二冊（書入は九冊目まで）

をもとにして、藤井高尚の、主として本文校訂に関する態度や古本（三巻本）の本文評価、延徳本（三巻本一類の面影を有するのではないかと思われる古写本）の校合等について若干の考察を試みた。

また2では、高尚の著述一般を通覧して、『消息文例』、『松屋文集』、『松屋文後集』、『三のしるべ』、『松の落葉』等にみえる、清少納言や枕冊子に関する記事を紹介し、飯田正一博士御所蔵の「藤井高尚書簡」[3]なども参照させていただ

きながら、『新釈』こそ未完であるが、高尚にとって、清少納言枕冊子は、伊勢物語、源氏物語、古今和歌集とともに、関心の深かった古典文学の一つである旨を述べた。そして、それは文章家としての彼が、枕冊子のすぐれた文章、文体に深く傾倒していたためであるとしたのであった。なお、高尚は、例外なく『枕冊子』の文字を用いている。

近年、岡山大学の工藤進思郎氏は、ひろく、藤井高尚全般にわたって考察を究められ、その成果は、『藤井高尚と松屋派』[4]としてまとめられた。本書は高尚の鈴屋入門からはじまって、『消息文例』の成立、『二のしるべ』(『文のしるべ』)などに見られる文章論、『伊勢物語新釈』の方法、さらには、清水宣昭の源氏物語研究に及ぶ労作であり、また昨年(昭和六十二年)八月、の解釈学会全国大会においては、「藤井高尚の解釈学――『清少納言枕冊子新釈』を中心に――」のご発表があり、その要旨が、『解釈』(昭和六十二年十一月号)誌上に掲載された。かくして藤井高尚の古典研究に関して、このところ一段と研究が深められることとなった。

以下に掲げる、「藤井高尚、清少納言枕冊子関係略年表」は、先掲、拙論と並行して作成した旧稿であるが、拙論を補う意味で、またご叱正をいただくためにあえて示すことにした。

注

(1) 『相愛女子大学 相愛女子短期大学 研究論集』第十二巻第二号 第十三巻 昭和四十一年二月

(2) 大阪私立短期大学協会『研究報告集』(第一四集) 昭和五十三年二月

(3) 飯田正一博士「藤井高尚書簡集」(一)〜(四)『国文学研究』第五十五集〜第五十八集・昭和五十年二月〜昭和五十一年二月

(4) 昭和六十一年五月十五日発行、風間書房刊

二

藤井高尚、清少納言枕冊子関係略年表

年	事項	資料
寛政十二年（一八〇〇）　三十七歳	寛政九年冬から同十一年十月十日あまりまで、執筆していた『消息文例』刊行。その中に、枕冊子の本文（春曙抄による）が数カ所引用されている。	『消息文例』枕冊子引用箇所 ○「文におのがことをいふ例」（上巻・十三丁オ）『まろ』、○「文にさきの人の事をいひやる例」（上巻・十五丁ウ）『そこ』、○「うはがきの事」（上巻・十八丁ウ～十九丁オ）、○「先日　ひと日」（下巻・七丁オ）『ひとよ』、○「子細　訳さるやう　ゆゑ」（下巻・十八丁ウ）『よし』。
文化元年（一八〇四）　四十一歳 八月	塙保己一所蔵の堺本（宸翰本）を江戸の宿で人にうつさせる。このころから、本格的に枕冊子の研究をはじめる。	「此本は保己一検校塙氏のもたるをかりて大江戸の旅のやどりにて人にうつさせたる也 文化元年　八月　　高　尚」 （岸上慎二博士蔵『堺本枕草子』高尚自筆奥書による）
九月八日	このころ、江戸神田の仲町足立屋という宿で、門人河本宣易と、枕冊子	「此枕冊子にくれなゐして所々かきいれたる

本文の読み合せをおこない、校本五冊を作成する。

校合に使われている本は、加藤千蔭所蔵、清水浜臣の所写のもの。古本（奈佐勝皐蔵、屋代弘賢所写のもの、―三巻本とおもわれる。）、古一本（奈佐勝皐蔵、塙保己一所写のもの）、宸翰本（堺本）など、或いは後日校合したものかもわからないが、亀山直綱蔵、三井寺正般筆「延徳二庚戌五月下旬写之畢」とある本（三巻本一類のおもかげをもつかと思われる。）などである。

文化八年（一八一一）　四十八歳

四月

は、加藤千蔭のもたるふるきうつしまきを、清水浜臣の写したるを、又うつしたる也。あゐして古本としるしたるは、故奈佐久左衛門日下部の勝皐といふ人の、つたへもたりしいとふるきうつしまきを、屋代太郎弘賢のうつしおかれたるをかりてものせし也。古一本としるせるは同じ奈佐氏の本を、検校塙保己一の人にうつさせおきたるをかりてよみあはせてじるせし也。此ふたつはまたく同じかるべきことわりなれど、うつすたび〳〵にかきあやまるものにしあれば、かたみによきあしき事の有なり。古本と有（古一カ）本とまたく同じき所は古本のかたをしるせり。大江戸の神田の仲町といふ所なる足立屋にやどりをりて、河本宣易と、もによみあはせてものしたるになむ。

文化元年九月八日　　藤井高尚」

「延徳本といふは直綱亀山氏之蔵にて、奥に延徳二庚戌五月下旬写之畢とあり又右之本は三井寺正般筆跡也とあり」

（岸上慎二博士蔵　藤井高尚筆『枕草子校本』五冊の一冊目のはしがきによる）

「松屋大人著

四月刊の『おくれし雁』(初版は文化四年)の奥に附された恵比須屋市右衛門(城戸千楯)の明学堂和書目録に、「枕草子新釈 追彫 全部五冊」として掲載される。

この年の六月の城戸千楯の序を有する『松屋文集』上下二冊の中に、枕冊子の影響を受けたかと思われる文が見える。すなわち、「夏夜といふ事を」(上巻・三十丁ウ)「遠望舎の詞」(上巻・十三丁オ)「柳園の詞」(上巻・十三丁ウ)「閑中五月雨といふ題を」(上巻・二十四丁ウ)など。

文化十四年(一八一七) 五十四歳

秋

奈良の大原民声の求めにより、「清少納言之碑詞」を記す。大野孝信の清少納言霊夢伝説を中心としたもので、末尾に、『枕冊子新釈』という注釈を著そうとして、あれこれ古い本を校合していたことも述べている。

同(枕草子)新釈 追彫 全部五冊

此書は至て正しき古本をもって校正し先釈の是非を論じ、新なる考を挙たる書也」

(『おくれし雁』文化八年版附載「明学堂和書目録」による。)

『松屋文集』

「夏夜といふ事を」

「夏はよる、月のころはさらなりと清少納言のいひける、さることぞかし。……くれはて、夕やみのほどは、しばしものむつかしげなれど……月出ては、また、さらにいはむかたなし。……さるをりしも、かといふむしのなのりしつ、来るぞにくき。…」

(上巻・三十丁ウ~三十一丁オ)

「清少納言之碑詞」

「……高尚枕冊子新釈登云書遠加伎著須止之弖此彼登古本等校合勢乎流頃斯母此碑乃詞遠登伊麻太相見努奈良人能乞於許勢多留波彼君乃霊能導歟止歓美歓美毛加伎記志都…」

(『松屋文後集』下巻・二十二丁ウ~二十五丁オ)

文政五年（一八二二）　五十九歳

閏正月

このころ、枕冊子の仕事は、かなり難渋していたようである。

文政七年（一八二四）　六十一歳

十一月

『文あはせ』上・下二冊（片岡徳編、初版、文政四年刊）の、奥に、「松乃屋藤井高尚大人著述目録」が記され、その中に、「枕草紙新釈十二冊」とあり、以前五冊とされていたものが十二冊になったようである。春曙抄の巻数に準拠したものであろうか。因みに現存の『枕冊子新釈一』は春曙抄巻一に相当する。

清水宣昭宛書簡　文政五年閏正月十四日付　書簡番号一

「一枕冊子注釈、書懸有之候へ共、手及兼候而、当時休ミ居申候。近年ニはと存居候。」

（飯田正一博士「藤井高尚書簡集（一）」『国文学研究』五十五集　昭和五〇年二月による。）

『文あはせ』下の奥

「文政七甲申年十一月吉旦

大坂本町堺筋

書林　葛城宣英堂奈良屋長兵衛

松乃屋藤井高尚大人著述目録

枕草紙新釈		十二冊
源氏物語新釈		六十冊
古今集新釈		十冊
伊勢物語新釈		五冊
消息文例		二冊
さき草		一冊
文　合	松のや大人判門人の文を左右にわかつ	二冊
同	二編　三編　四編　五編各二冊つ、追々出来	
松及や家集		二冊
松乃や文集	初編出来　後編嗣出	二冊

文政九年（一八二六）　六十三歳

秋

この年の秋の序を有する『三のしるべ』の下によると、文をならうには、清少納言の枕冊子が質量ともに適当であるとする見解がみられ、本文校訂、注釈をほどこした『枕冊子ノ新釈』はまだ清書を終えていないといっている。

日本紀局考　一冊
おくれし鳫　一冊
大祓後々釈　一冊
弾物さだめ　一冊
浅瀬しるべ　一冊
詞の花かたみ　文章をかきならふ書也　四冊」

『三のしるべ文下』

「文のしるべ」

「…清少納言の枕ノ冊子ぞ巻の数もよきほどにして、きざみ〳〵ありてよみやすく、文はためでたければ、たよりよきものにはありける。まづはじめのほどは、これによりてまなぶべく、

此冊子も板にゑりてすれる本、みなわろく注もよきはなし。さるからに、おのれ江戸にてふるきうつしまきどもさがし出て、見わたし考へたゞしおけるに、注をものして枕冊子ノ新釈と名づけたるあり。世にひろめんとすれども、いまだきようかきをへず、おのが注釈を出さざるこなたは春曙抄といふ本を見るべし。

文政十一年(一八二八)　六十五歳

この年刊行の『松屋文後集』(序は文政十年三月八日大橋長廣)上・中・下三冊の中に、枕冊子の影響を受けた文(例えば、「春雨のこゝろを」(中巻・三丁ウ、「蓮の詞」(中巻・十八丁ウ)、「雪見のこと葉」(中巻・三十七丁ウ、三十八丁オ)など)が見られ、「清少納言之碑詞」(下巻・三十二丁ウ～三十五丁オ)も収められている。

文政十二年(一八二九)　六十六歳

四月

『三のしるべ』上・中・下三冊刊行。その奥に附せられた「幸之倉和書目録」国学書林　恵比須屋市右衛門(城戸千楯)によると、依然として「松屋大人著　同(枕草子)　新釈　追彫　全部五冊」と記されている。

春に、中村孫三郎寛が序を書いている『松の落葉』四巻目録一巻はこの年刊

かきならはんには、題を出して、ものすべし。」

(下　四丁ウ・五丁オ)

『松屋文後集』

「蓮の詞」

「池のはちすのむらさめにあひたるを、こゝちよげなるもののたとへに、むかしの人のいひしはさることぞかし。ひぢのうちより生出るものゝ、いさゝかもにごりにしまず、うす紅のいろのいひしらずきよげに咲たるがめでたきに、香さへなつかしく、葉のいとあをやかにて、きら〳〵とみゆる露の、しら玉雨ふるをりは、かずそひて、げにこゝちよげにも、すゞしげにも見えわたれり。…」

(中巻十八丁ウ)

『松の落葉』

「枕さうし」

中ころに、なにがしの枕さうし、くれがしのまくらさうしといふ書見ゆれば、ひとくさのさうしにぞありける。そはいかなるものにかと、つら〳〵考るに、枕といふは源氏ノ物語の桐壺の巻に「やまとことのはをも、もろこしの哥をも、たゞそのすぢをぞ枕ごとにせ

行されたようである。その中の、「本 さうし」(巻四・二十九丁ウ)、「枕さうし」(巻四・三十丁オ〜三十一丁オ)の項には、題号についての考察が見られ、「いほり」(巻一・三十丁オ)、「獅子 狛犬」(巻一・三十六丁ウ)、「短籍」(巻一・五十一丁オ)、「菊のきせわた」(巻三・二十七丁ウ)、「あゆ」(巻三・三十九丁ウ)、「長押(なげし) しきゐ」(巻三・四十八丁ウ)、「神の宮人の於々といふ声を高くたつる事」(巻四・二丁オ)、「夾笠下 鉄尺」(巻四・三十二丁オ)、「扇つかふはなめきわざとする事」(巻四・五十三丁オ)などの項には、いずれも枕冊子を引用しての説明がみえる。引用本文は『春曙抄』を中心に自分の校訂文をも用いている。

させたまふ。」といへるまくらにて、つねのもてあそびぐさにするこゝろなり。これはものかゝぬさうしをつくりて、つねにかたへにうちおきて、見きゝすること、おもひえたることゞもを、わすれぬうちに、そこはかとなくかきつくるれうのさうしにて、つねにもてあつかふものなれば、枕冊子といひならへるにぞありける。ことさらにかきあらはせりといふばかりのものならねば、書の名もなく、たゞその人の枕さうしといふになん。さとび言にて、何がしのてびかへといふやうのことなり。清少納言のには、はやうより注釈もこれかれとあれど、枕さうしといふゆゑを、みなときえざりき。その書に「枕にこそはし侍らめ」といへるは、「枕冊子にこそは」といふべきを、はぶきていへる詞にて、そのかみの人のものいひには、「枕」とのみもいひたりけんかし。栄花ノ物語わか枝の巻に「きぬのつまかさなりてうちいだしたるは、いろ〳〵のにしきを、まくらさうしにつくりて、うちおきたらんやうなり」と見えたるも、ものかゝぬさうしをつくりて、つねにかたへにうちおくならひのあるによりて、かくはいへるにあらずや。」(巻四・三十一丁オ)

天保六年(一八三五)　七十二歳

二月

清水宣昭宛に手紙によると、『枕冊子新釈』は先年二三冊書きかけたものはあるが、『伊勢物語新釈』と似たようなものであるから、『松の落葉』の方を先に著した。今は『古今集新釈』にとりかかっているとあって、『枕冊子新釈』はこのところ、一頓挫しているようである。

天保九年(一八三八)　七十五歳

九月

健康を害した高尚は『枕冊子新釈』はそのままにして、『古今集新釈』の完成と出版とを急ぐようになる。しかし、前年二月十九日の大塩平八郎の事件もあって出版界は不振で引受けるところはなかった。九月十四日の清水宣昭宛書簡によると、それでも「二陳」として次の仕事のことを書いている。その中に「枕冊子春曙抄補正」のことが先ず最初に書かれている。「本文数本校合ノ是非ヲも記」すとあるから、高尚自筆書入「枕草子春曙抄」(田中重太郎博士旧蔵)などはその有力な資料の一つであったのだろうか。

天保一一年(一八四〇)　七十七歳

八月十五日

高尚、枕冊子の著述を未完成のまま宮内において亡くなる。

清水宣昭宛書簡　天保六年二月廿七日付　書簡番号　二三二

「一『枕冊子新釈』は先年二三冊も書懸候。其節目録ニは出し候得共、『伊勢物語新釈』と似たるもの故ニ先差達候而『松の落葉』著申候。扨又哥集之注釈かゝず欠候故、『古今集新釈』をも大分書懸申候へ共、遠遊ニ而加様之事埒明不申、他出ヲ止候而追々書立可申候也。…」

(飯田正一博士「藤井高尚書簡集(三)」『国文学研究』五十七集、昭和五〇年一〇月)

清水宣昭宛書簡　天保九年九月十四日付　書簡番号　四五

「二陳拙子も今少しの残生ニ候へば、志候もの可成丈書置候志ニ御坐候。

枕冊子春曙抄補正ニ

本文数本校合ノ是非ヲも記。

万葉略解補正

此二ツ『古今新釈』ノ次ニ出し候事。

其次ニ、

土佐日記考証補正

『さ衣物語』古写本数本校合正本」

(飯田博士「藤井高尚書簡集(四)」『国文学研究』五十八集、昭和五一年二月)